

kigokoro

EIDAI Corporate PR Magazine Summer 2022 / vol.12



kigokoro

Summer 2022 / vol.12

第12号 令和4年7月1日発行
編集・発行：永大産業株式会社 事業管理部 広報課
〒559-8658 大阪市住之江区平林南2-10-60 TEL:06-6684-3058 FAX:06-6684-3051

その床、天然より天然

銘樹 Mokutone
MEIJYU モクトーン

木を活かし、よりよい暮らしを

EIDAI

お客様相談センター

☎ 0120-685-110

[受付時間] 平日・土曜日9:00~18:00(休業日:日曜日、祝日、夏期休暇、年末年始)

永大産業株式会社
www.eidai.com

EIDAI ショールームでお確かめください。

EIDAI SR

検索





ENボード株式会社

完成した建物、設備等のご紹介



ENボード株式会社 (2021年12月撮影)



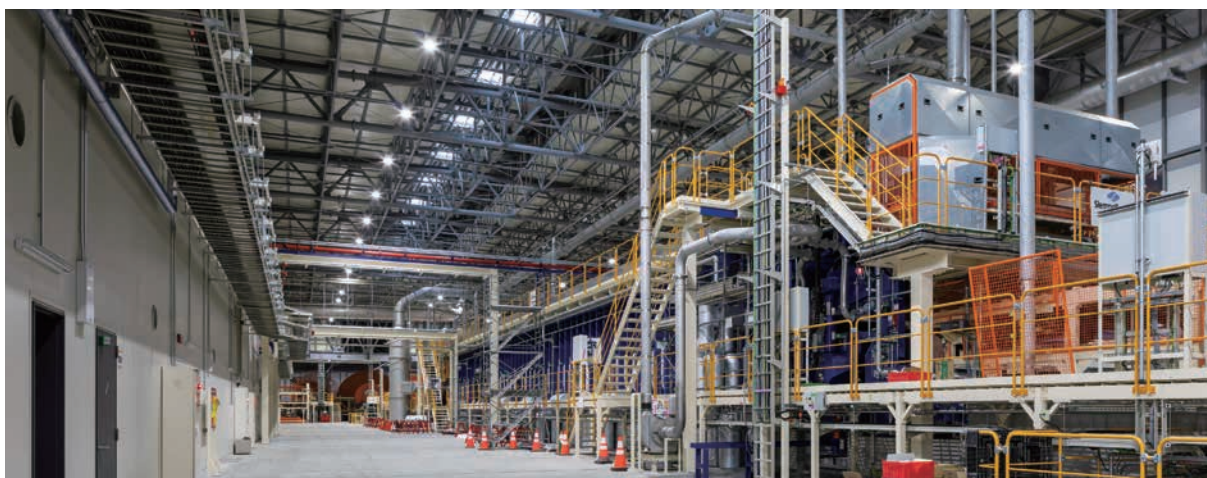
A 事務所棟。木を扱う企業らしく、棟の内部にはいたるところに木製の建材を使用しています



B 木材チップの保管倉庫。本格的な操業に向けて、ストックを増やしています



C 環境に配慮したバイオマスボイラー



D 日本最長47メートルの長さを誇る連続プレス



D ドイツからのスーパーバイザー(=専任技術者、前列)とともに、試作の成功を祝って記念撮影を行いました



D 5月25日に試作品を生産し、寸法安定性や物性などを確かめました



ENボード株式会社 (2021年12月撮影)

本質ボード(PB)の生産設備を更新し、事業の強化を図っているところ、当社は日本ノボパン工業株式会社(大阪府堺市)と2019年5月、PBを生産する合弁会社「ENボード株式会社」を設立しました。

わが国のパーティクルボード業界のメーカー同士が手を組み、化粧用台板や構造用PB、フロア台板を生産するとともに、新たな用途開拓に乗り出すことは、木材資源を無駄なく利用するという「マテリアルサイクルの重要性」を広める上で、非常に価値あるものと当社では考えています。

新会社の社名は、EとNがそれぞれ、出資会社である2社の頭文字を表していますが、同時に仕入、販売に関わる全てのお取引先様との「ご縁(E・N)」を大切にしたいとの思いを込めました。

ENボード株式会社の新工場は、東西両市場の需要をにらみ、静岡県に建設しました。駿東郡小山町内に広がる工場団地の一部を取得し、東京ドーム2個強に相当する約9万3000平方メートルの敷地を確保しています。

工場からすぐ南には東名高速道路が走っており、インターチェンジも近く物流という点では好条件が揃っています。

設備面では、ドイツ・ジンペルカンパ社製の最新鋭連続プレスを導入しました。長さは47メートルあり、単体の生産ラインでは、わが国最大の生産能力(月間1万5000トン)を誇ります。

設備面ではこのほか、重油を用いないバイオマスボイラーを設置しました。集荷した木材チップからパーティクルボードに向かないものを選別し、サーマルリサイクルを行って動力とします。

このボイラーは蒸気を作ると同時に油も熱し、蒸気は木材チップを乾燥させるドライヤーに、また油はパーティクルボードを圧縮する連続プレスの熱源に用います。

ENボード株式会社では、前述の化粧用台板、構造用PB、フロア台板などを生産します。また、連続プレスの特性を活かしつつ、新しい技術の導入によって、フローリングの生産を前提とした薄物フロア台板のほか、従来品よりも比重を抑えた軽量PBなども生産します。

これからの予定では、約半年をかけてJIS(日本産業規格)認証を取得します。その後、11月を目途に商用生産を開始し、2023年4月からのフル生産を目指します。

生産拠点のご紹介

ENボード株式会社

最新鋭のパーティクルボード生産工場が始動

当社(永大産業株式会社)と日本ノボパン工業株式会社の合弁会社で、パーティクルボード(以下PB)を生産するENボード株式会社の新工場が先頃完成し、この5月に初期流動品(フアイーストボード)の生産を行いました。

ENボード株式会社 会社概要

所在地	〒410-1305 静岡県駿東郡小山町湯船字 下原1278-11 TEL:0550-70-9350 FAX:0550-70-9351
代表者	代表取締役社長 高橋 真
事業内容	パーティクルボードの製造、 加工、販売
設立	2019年5月22日
資本金	1億円
出資比率	永大産業(株) 65% 日本ノボパン工業(株) 35%

永大産業株式会社 山口・平生事業所

半世紀以上の歴史を刻む、重要な西日本エリアの生産拠点

山口・平生事業所は、当社の主力製品であるフローリングの生産拠点です。設立からすでに半世紀が経過しましたが、新しい省エネ設備の導入など、さらなる挑戦を続けています。



永大産業株式会社 山口・平生事業所 全景

山口・平生事業所の前身は永大木材工業株式会社で、1968年3月に設立されました。

当初の主力製品は合板で、ピーク時には月産500万枚（3ミリ、3×6判換算）を誇るマンモス工場でした（合板生産は1997年に停止）。その合板の剥き芯を活用するため、1973年にパーティクルボードの生産工場を建設しました。敦賀事業所とグループ会社である永大小名浜株式会社とともに、わが国における木質ボード業界を牽引してきました。（同事業所におけるパーティクルボード生産は2019年に停止）。

永大産業株式会社の山口・平生事業所として新たなスタートを切ったのは1982年のことであり、それに合わせて同事業所では、本格的な木質フローリングの生産を始めました。

当社の初期のヒットとなったカラフローア第1号の「タフトップH」は、この山口・平生事業所で生産されました。「タフトップH」は、1960年代に一世を風靡したプリント合板の色合わせの技術に応用した製品です。また、集合住宅向けの直貼り遮音フローリングも同事業所で産声をあげました。

山口・平生事業所の歩み

年 月	内 容
1968	3 永大木材工業株式会社設立
	12 第1期合板工場竣工
1969	8 第2期合板工場竣工
1971	5 ツキ板工場竣工
1972	7 流通センター竣工
1973	4 第3期合板工場竣工
	5 パーティクルボード工場竣工
1982	7 カラーフローア「タフトップH」発売開始
	9 永大産業株式会社 山口・平生事業所に改組
1985	7 直貼りフローリング「ダイレクト」発売開始
1987	10 直貼り遮音フローリング発売開始
1993	11 バイオマス発電設備導入
2007	1 フローリングでわが国初のPEFC-CoC認証取得
2008	6 新物流センター竣工
2014	3 太陽光発電事業開始
2022	2 エネルギー管理優良事業者等中国経済産業局長賞受賞
	6 バイオマスボイラー竣工

フローリング生産から40年目の節目を迎えた現在は、「銘樹」シリーズの中で今、最も売れている「銘樹モクトーン」を中心に、直貼り遮音フローリング（ツキ板、シート）を生産しています。

前回のKigokoro 11号でもご紹介した通り、同事業所は省エネ、創エネの分野で先進的な取り組みを行ってきました。目下、環境に配慮したバイオマスボイラーの建設が完了し、7月から稼働の見通しです。

設立から半世紀余りが経過しましたが、同事業所は新製品の生産や新しい省エネ設備の導入など、今なお挑戦を続けています。



永大産業株式会社 山口・平生事業所生産品のご紹介 ツキ板フローリング/直貼り遮音フローリング

永大産業株式会社 山口・平生事業所では、半世紀以上にわたるものづくりを通じ、蓄積してきたさまざまなノウハウを駆使して、機能性、耐久性に優れた木質フローリングを生産しています。



銘樹モクトーン 施工例



ツキ板フローリング生産ライン①



ツキ板フローリング生産ライン②

ツキ板フローリング

ツキ板フローリングの「銘樹モクトーン」は、新塗装「Eナチュラル塗装」を採用し、現在のフローリングが求められる性能を満たしながら、天然木の色や自然な風合いを感じることができ、抗菌・抗ウイルス加工のフローリングです。



銘樹ダイレクト 施工例



直貼り遮音フローリング生産ライン①



直貼り遮音フローリング生産ライン②

直貼り遮音フローリング（ツキ板シート）

直貼り遮音フローリングでは、表面にツキ板をあしらった「銘樹ダイレクト」「スキスムSダイレクト」シリーズなどがあります。また表面をオレフィンシートで仕上げた「スキスムTダイレクト45」も品揃えしています。

ものづくりの技術を次世代に継承

同事業所でのフローリング生産が7月でちょうど40年目を迎えるにあたり、先人達の築かれた歴史の重みを感じています。

これからも継承してきた技術を次の世代に伝えながら、さらに質の高いものづくりを目指していきたいと考えています。

山口建材工場長
守田 勝明

永大産業サッカーグラウンド

3ページの山口・平生事業所全景で中央からやや右下に見えているのがサッカー用のグラウンドです。かつて当社はサッカークラブを有し、創部3年目にして日本リーグ1部、現在でいうところのJ1に昇格し、ななかつ決勝戦（天皇杯）にまで駒を進めました。当時の選手たちはこのグラウンドで汗を流し、技を磨いたといえます。現在は地域で開催されるサッカートーナメントの試合会場や、高校の女子サッカーチームの練習場として活用いただいています。



照明設備のあるサッカーグラウンド



クラブハウス

EIDAI Headline News

永大ベトナムが操業10周年 よりよい製品づくりに向け、さらに前進

当社の100%出資子会社でフローリングを生産するEVC(=永大ベトナム、社長:森田晋司)が、今年5月に操業10周年を迎えました。これを祝う記念式典が5月に現地で開催され、挨拶した社長の森田は、「この10周年はひとえに従業員の皆様方の尽力の賜物です」と感謝の意を表すとともに、「お客様に喜んでいただけるよう安全第一で、今後もより良い品質、より高い生産性を目指して前進しましょう」と社員に呼びかけました。



画像上:挨拶する社長の森田(向かって右)、画像下:記念式典の様様



永大ベトナム工場内部(ムクフローリング生産工程)



Eidai Vietnam Co., Ltd.

EVCはベトナム国ハナム省のドンバンⅡ工業団地内にあり、2012年、最初にムクフローリングの生産を開始しました。その後、生産品目をシートフローリング、挽き板フローリングへと拡大し、当社にとって不可欠の生産拠点へと成長しました。

当初は全量、日本国内向けの製品を生産していましたが、2021年4月からは経済成長の著しいベトナム国内向けの販売も開始しました。

現在の社員数は293名(2022年3月末日現在、出向者5名含む)で、その男女比率は4:6です。

EVC 10年の歩み

年	月	内 容	年	月	内 容
2011	6	ハナム省政府から投資許可証を取得 EVCを設立	2013	6	操業1周年記念式典を開催
	7	工場建設開始	2014	2	挽き板フローリング生産設備設置開始
	11	敦賀建材工場でベトナム人材研修を開始		6	挽き板フローリング生産開始
2012	2	工場建物建設終了	2017	2	挽き板フローリング目標生産数量達成
	3	ムクフローリング生産設備設置開始		5	操業5周年記念式典を開催
	5	竣工式開催 EVC操業ムクフローリング生産開始	2021	4	EVCからベトナム国内への販売開始
	7	JAS(複合2種フローリング)を取得		5	シートフローリング目標生産数量達成
	8	ムクフローリング、日本国内に初入荷		12	新規建屋建設開始
	10	シートフローリング生産設備導入	2022	5	操業10周年記念式典を開催
2013	3	JAS(複合1種フローリング)を取得		6	新規建屋完成(予定)
		シートフローリング生産開始		7	新規建屋竣工式(予定)
	5	製品倉庫完成			

TOPICS

安定生産を目的とした 新規建屋を建設



2022年5月末時点

EVCでは将来を見越して、約60,000平方メートルの敷地を確保しています。現在、遊休地を活用して安定的な生産体制を確立するための新規建屋(延床面積約4,600平方メートル)を建設しており、6月末日での完成を目指しています。



第十二回 石川県 金沢市 金沢駅(鼓門)と御手洗池

探訪

日本の原風景

加賀百万石の玄関口におもてなしの心から生まれた新名所

螺旋状の2本の柱に支えられた「鼓門」は金沢を訪れた方を雅な雰囲気でお迎えしてくれる。ここから、金沢の旅は始まる。

前田利家が金沢城に入城した後、さまざまな文化が育まれた加賀百万石。兼六園をはじめ、茶屋街や武家屋敷など、今もその当時の街並みが色濃く受け継がれている。

その金沢市の玄関口にあたる金沢駅東口に「鼓門」が2005年に完成。伝統芸能である能、素囃子で使われる和楽器の「鼓」をモチーフにした重厚な木造の門は2011年米国旅行雑誌で「世界で最も美しい駅14駅」にも選出された。

その「鼓門」から車で北へ走ること1時間30分のところに、数多の伝説が残る霊泉「御手洗池」がある。深い森の中にひっそりと佇む池は、鏡のように新



七尾市「御手洗池」



緑に萌える木々を水面に映し込む。そこにはまるで1枚の絵画のような光景が広がっていた。

営業所・ショールーム紹介 金沢営業所・金沢ショールーム

お客様のよりよい住まいづくりに向けて

当営業所・ショールームでは、石川、福井、富山の3県のお客様を担当させていただいております。地元のビルダー様が過半を占めますが、末端のお施主様をはじめ、より多くのお客様に当社のことを知っていただく、今年からまた、ショールームの見学会を兼ねたイベント活動に力を入れ始めました。3月からは講師を招いての「ベビー&ヘッドマッサージ」を実施しております。今後も、お客様のよりよい住まいづくりに向けて、取り組んでまいりますので、さらなるご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



住 所 〒920-0811 金沢市小坂町北207-2
T E L 076-252-5302(代)
休 館 日 土曜日、日曜日、祝日、夏期・年末年始、5月連休
営業時間 AM10:00~PM5:00

◇金沢営業所・ショールームスタッフ◇
写真前列右から阿久津、高屋(所長)八木
写真後列右から加藤、小林、丈下、末広です。



壁材「銘樹ブロックウォール ブラックチェリー」、
屋内重歩行対応シートフローリング※「アレーザ ダイレクト ブレンドチェリー」、見切材、幅木
※カタログ非掲載品

平生町役場 総務課、建設課様のご感想

新庁舎の3階に設置した議場で、最も目立つのは中央に位置する議長席の背面です。傍聴席からの視覚的なイメージに加え、議会の様子をモニターでも御覧いただける場所とするため、背面をどのようなレイアウトにするかずっと悩みました。最終的に今の形に落ち着きましたが、かなり良い感じに仕上がったと思います。永大産業様の話によると、このブラックチェリーという色柄は経年変化でより深みが出るとのことですので、これからも長く使っていきそうです。また、1階の床には町民の憩いの場として交流室を設けましたが、上履きに履き替える必要のない床材ということで利用させていただきました。地元を代表する企業として、これからもよりよい製品をご提供いただき、地域の振興にご助力いただきたいと思います。



「銘樹ブロックウォール ブラックチェリー」経年変化でより深い味わいに



3階の議場に採用された壁材「銘樹ブロックウォール ブラックチェリー」

モニターに映る、最も重要な
場所だからこそ良いものを



5月2日から新庁舎としての利用を開始した「平生町役場」

当社の意匠性の高い「壁材」や耐久性に優れた「フローリング」などの製品は、公的機関の庁舎にもご採用いただいています。

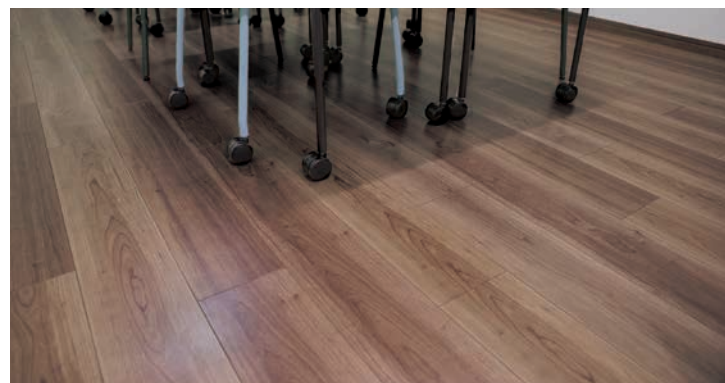
山口県平生町で建設が進められていた平生町役場の新庁舎が、このほど完成し、5月から利用を開始しました。メインとなる3階の議場には、当社の壁材「銘樹ブロックウォール ブラックチェリー」を、また町民の集まる交流室の床には、重歩行用に耐摩耗性を高めたフローリング「アレーザ ダイレクト ブレンドチェリー」をご採用いただきました。今回は自治体の建物における事例をご紹介します。



平生町と永大産業

新庁舎の入り口正面にある平生町の町章は「平生」、「山」、「錨」、「塩」を円形に図案化し、1956年に制定されたものです。

「塩」とはかつて同町にあった広大な塩田を表し、フローリングの主力工場である当社の山口・平生事業所(旧・永大木材工業株式会社)は1968年3月、この塩田の跡地に木材総合コンビナートを建設するとの目的で設立されました。以来半世紀以上にわたり、同事業所は地元根ざす生産拠点としてもものづくりを行っています。



交流室 表面の耐久性を高め、コンクリートに直貼りできるフローリング「アレーザ ダイレクト」



「アレーザ ダイレクト」とコーディネートさせた幅木

1969年 敦賀でパーティクルボードの生産に着手

パーティクルボードは小径の間伐材利用を目的に、1930、40年代のヨーロッパ、特にドイツやスイスで開発が進み、実用化されました。

わが国では1953年に他社が初の国産パーティクルボードの生産に成功し、当社も1955年、本社に小さな試作用のプラントを建設して、パーティクルボードの研究を始めました。

1950年代といえ、わが国の合板の発展期にあたり、フィリピンなどから大径のラワン材が入荷していた時代です。毎日大量に出る合板の剥き芯をなんとか利用して、収益に結びつけたいとの思いから、当社が目をつけたのがパーティクルボードでした。

詳細な資料は残されていませんが、おそらく初期の研究段階で、強度や耐水性などあらゆる面で、合板をしのぐ試作品の生産には至らなかったのでしょう。むしろ合板を高次加工する方向が現実的であるとして、当時の経営陣はいったん、パーティクルボードから離れる判断を下したようです。

その後、わが国は本格的な高度成長期を迎え、国民生活が徐々に豊かになる中で、その象徴ともいえるテレビ（キャビネット）、あるいはステレオ（スピーカー）用のキャビネット）の需要は右肩上がりで伸びていきました。ただ、弱電メーカーの立場として、価格変動の大きい合板は極力敬遠し、工業的に安定的供給が図れる素材を求めていることは容易に想像できます。

合板の高次加工という点では、難燃合板やプリント合板の開発で相応の成果を得た当社でしたが、こうした合板以外の素材を求めるニーズのほか、すでにこのころから合板用原木の入手に暗雲が垂れ込めていたこともあって、再度、パーティクルボードに着目したのは、1960年代の後半になってからでした。

当社は西ドイツにあったヒンメルヒーパー社の技術を導入し、敦賀事業所にパーティクルボード生産工場を建設することになりました。

投資額は10億円、わずか5カ月で工場完成を目指していました。



敦賀パーティクルボード工場

需要拡大の弱電向けを中心に供給

60年代はどの企業もそうだったかも知れませんが、今となっては、当社の「モレツぶり」がうかがえるエピソードといえます。さて、最終的に工場は1969年9月に竣工し、生産を開始しました。

日本硬質繊維板工業会（当時）の資料によると、1968年から1972年まで、弱電向けのパーティクルボードの出荷量は、毎年10%ずつの伸びを示しており、敦賀事業所のパーティクルボード工場でも、キャビネット用（15ミリ厚）を中心に生産していました。

パーティクルボードの生産を開始して4年経った1973年の資料によると、敦賀事業所におけるパーティクルボード生産の内訳はキャビネット用が40%と最も多く、次いで家具用30%、建築用20%、その他10%でした。

ちなみに当社がパーティクルボード生産を開始する前に、すでに8社のメーカーがパーティクルボード事業に参入し、当社と同じ合板生産が母体のメーカーはパーティクルボードの表裏を単板で挟んで製品化するということも行っていました。

1971年になると、一気に5社が新規参入を果たし、これにより競争も激しくなりました。

1973年7月の調査によれば、当社の全国シェアは8.2%（生産能力ベース）でしたが、4カ月後に永大木材工業（現山口・平生事業所）で、2カ所目となるパーティクルボード工場の竣工を控えていた当社は、虎視眈々とシェア拡大を狙っていました。

今回は当社グループの住宅資材事業と並んで、もう一つの大きな収益の柱である木質ボード（パーティクルボード）事業の変遷についてご紹介します。

EIDAI HISTORY 第12回 木質ボード（パーティクルボード）

1

Pro's Note by 住宅産業塾

監修：住宅産業塾／日菱企画株式会社 事務局
〒105-0001 東京都港区虎ノ門2-5-4 未広ビル4F TEL:03-3503-2867 FAX:03-3503-2869
E-mail:hbsg@jyutakujuku.co.jp URL:http://www.jyutakujuku.co.jp

大激変時代の成功の鍵

先日、「脱炭素社会の実現に資するための建築エネルギー消費性能の向上に関する法律（建築物省エネ法）等一部を改正する法律案」の閣議決定により、施行予定の2025年度から、住宅省エネ基準適合が義務化されることになりました。特に中小工務店にとって負担が大きいという反発もありましたが、世界の潮流や推進を必要とする方々の努力により、状況が一転しました。

脱炭素社会への適応はもはや必然となりましたが、すでにここ数年の変化はすさまじいものがあります。コロナ禍や不安定な世界情勢によるインフレ、そして資材の不足をきっかけに業界全体が多大な影響を受け、対応を迫られてきました。我々は、これらの変化に対応するのはもちろんのこと、これを逆に新築需要が先細りの市場におけるチャンスと捉え、自らのイノベーション（進化）につなげる意識を持つ必要があります。

住生活産業への転換

住宅産業塾では、他社事例を学び実践に活かすBM（ベンチマーキング）を重視し、会員の皆様は積極的にこのBMを通じイノベーションに努めておられますが、最近でも、時代の変化の波を捉え、新たなチャレンジに取り組む企業が目立ち、学びあいを進めています。

例えば、家そのものの商品力強化にとどまらず、外構提案を組み合わせるなど、その後の生活をより深く追求した新たな提案にチャレンジする企業、性能向上やバリアフリーなど、さらに特長を付加したリフォーム事業に力を入れる企業、ホームオーナー様や地域への新たなサービスを立ち上げる事例として、不動産事業をテコ入れする企業や、介護ビジネスその他住生活に関わる新規サービスにチャレンジする企業など、色々な事例がみられます。これは、住宅を単なる「器」として捉えるのではなく、**住宅を中心に「暮らし」に関わるサービスを拡充する動き、すなわち住生活事業への転換を重視した進化の例**といえるでしょう。

BMが重要なイノベーションになる

コロナ禍で中断していた視察会を先日再開しましたが、この中でも特に印象的だったのは、**他社から積極的に学び、徹底実践を重視する姿勢**でした。

「学んだことを自社に取り入れ、徹底した実践を一つひとつ積み重ね自分のものとすることで、**圧倒的な一つの武器がなくなるとも他が追従できない圧倒的な差別化が可能である**」この方針が、商品・ビジネスシステム・そしてなにより人の教育にも活かされ、**実践に基づく「総合力」で顧客からの絶大な信頼を得、変化対応の連続の中でも強く進化を果たして**おられました。

自力で圧倒的な一つの新しい武器を創りあげるのは容易でなく、時間もかかります。肝心なのは、**積極的に他社からの学びを深め、それをどこまで実践し定着化させるか**であり、スピード感のある変化対応が求められる今、それが成果を決定的に左右します。まさに**BMが重要なイノベーションであり、BMの実践が最大の成功の鍵である**ということです。

住宅産業塾では他社事例を学び実践に活かすBM（ベンチマーキング）を推奨し、多くの機会を提供しています。詳しくは<https://www.jyutakujuku.com/>

